

記憶の端

松岡隆子

海ちかし近しと茅花流しかな
突堤は風視るところ日からかさ
師よ来ませ六月あをき日本海
交はしては言の葉涼し句碑のまへ
師の声のする夕焼の濃くなりぬ

パラソルの後ろ姿をもう追へぬ
完走のヨットしづかに帆を降ろす
夕映えの代田一枚浮きたてり
会はずに帰る雪溪の昏るるまま
かたつむり記憶の端を雨が降る
五月闇一步に何か見失ふ
松原に波音こもる夜涼かな